

声優ラジオのウラオモテ #03

夕陽とやすみは突き抜きたい？



KADOKAWA

朗読

豊田萌絵

AUDIO
BOOK

ドワンゴジェイピー
オーディオブック
限定特典

書き下ろしSS ブックレット！

NOT FOR SALE

『声優ラジオのウラオモテ #03 夕陽とやすみは突き抜きたい？』 オーディオブック特典
© Kou Nigatsu 2020 イラスト/さばみぞれ © KADOKAWA

「いやあゝ、お肉もお酒もおいしかったねえゝ」

高級焼肉店『重々宴』から出てきた乙女が、ご機嫌に口を開いた。

由美子とめくるは、「姉さん、ご馳走様でした」「ご馳走様です」と頭を下げる。

乙女はほんわかと赤く染まった頬で、手をぷらぷらと振った。

「いいのいいのゝ。番組でもらったやつなんだから、みんなで使うのが一番だもん」

ふにゃふにゃと笑いながら、乙女は身体を軽く揺すっている。

食事が終わったあとも、しばらくはお酒を飲みながらだらだらしていたが、それでだいぶ回ったらしい。普段よりもやわらかい笑顔で、意味もなく楽しそうにしている。

そんな珍しい表情の乙女を、めくるはまじまじと見つめていた。いや、見惚れていた。彼女の顔も乙女と変わらないくらい赤いが、きつとアルコールのせいだけ

ではない。

めくるが、そつとこちらに耳打ちしてきた。

「……歌種。桜並木さんって、普段からあんなに可愛い……、酔っの？」

「いんや、珍しいよ。今日は飲む量も多かったかな。いつもはもうちょい抑えてるよ。今日は、めくるちゃんが来てくれて嬉しかったんじゃない？」

めくるは本来、こつこつ集まりには参加しない。今回もやむにやまれず、だ。

乙女はめくると仲良くしたいようだし、はしゃいでしまった、というのはそれほどの外れでもないと思う。

めくるは複雑そつに唇をつにやつにやと動かすと、弱い語気ではとぼそと反論してきた。

「そつとこつと言われても困るこつーの……、やめてよ、本当に……」

それにしては、目尻が下がってますけどね、藤井さん。

めくるは大きく息を吐いたあと、表情を戻して乙女に向き直った。

「それでは桜並木さん。わたしはここで失礼します。お疲れ様でした」
ぺろりと頭を下げるめくる。

いつもの乙女なら、笑顔で「またね」なんて言うところだったろう。

しかし、今日の乙女はさぞかしお酒が回っているらしく、これ見よがしに唇を尖らせた。

コートのポケットに手を突っ込み、ぶんぶんと身体を振る。

「え〜、やだやだ〜。二軒目い〜ご〜っ〜よ〜。めくるちゃんともっつ〜っ〜に
いたいよ〜。飲み足りない、しゃべり足りない、帰りたくな〜い、付き合っ
てくれなきゃだ〜」

わかりやすい酔っ払いだ。

「めんどくせー……」と思われても仕方がない言動だが、当のめくるは目を見開

いて固まっている。思わずにやけそうになったのか、唇を固く引き結んでいた。
ンンンンンンッ！酔ってるわくちゃん可愛すぎる……！死ぬ！心臓が持た
ない！

そんな声が聞こえてきそうだった。

というか、胸を押さえている。大丈夫か。息できてるか。心臓破裂しちゃってな
い？推しでも過剰摂取したら中毒になるのかな？急性推し中毒で救急車く、と
かやめてよ？

由美子は心配になったが、めくるは無理やり笑顔を張り付けた。

「いえ、桜並木さん。申し訳ないのですが……」

困ったように笑い、めくるは断ろうとした。

けれど、相手はかなりの酔っ払い。

由美子が「あっ」と声を上げる頃には、素早く行動に移していた。

「やだ〜！ 今日めくるちゃんと朝まで飲むのーっ！」

「ッ！」

なんと、乙女はめくるに抱き着いてしまった。

ここで声を上げなかった、めくるの鋼の意志を称えたい。

口を大きく開けて、目は遠くを見つめ、明らかに叫ぶような表情だったが、なんとか堪えたらしい。叫び声は出ない。そのあと、目と口をぎゅゅと閉じるも、顔は見る見るうちに赤く染め上がる。かと思つと、今度は白くなり始め、表情も「無」に変わっていった。

意識がどこか遠くにいつている……。

失神したのかもしれない。

由美子がハラハラしている中、乙女はひとり駄々をこねていた。

「明日はせつかくのオフなのー！ 普段はこんなに飲めないんだから、たまには

しっかり飲みたいのー！　ねえ、いいでしょ？　付き合ってー」

ああなるほど、と思う。乙女がこんなにお酒を飲むのは、めくるがいついそではしゃいでいるのもそつだが、明日がオフなのも大きそつだ。

翌日が仕事だったら、ここまで深酒することもない。

忙しい中でのクタクタの休み、解放感がそつさせているのだろう。

とはいえ、めくるはめくるで事情があるわけで。

「姉さん、めくるちゃん困ってるから。二軒目はあたしが付き合っからち。それじゃダメ？」

由美子の言葉に、乙女はようやくめくるから手を離す。

ふらふらなめくるを介抱したいが、今はこっちが優先だ。

乙女は大きく腕でバツテンを作り、それを掲げた。

「ダメー！二軒目まで行ったら、帰りが遅くなります！　やすみちゃんは高校生

なので、あんまり遅くなるのはダメですー！」

酔っていても、そこはきちんと配慮してくれるらしい。

かといって、せっかく楽しそうな乙女を帰らせるのも残念だし、めくるを付き合わせるわけにもいかない。

そうではっと思いついた。

「あ、じゃあ姉さん。うち来る？・うちだったらいくら遅くなってもいいし、明日オッならそのまま泊まってもいいし」

「行くー！・やすみちゃんちで二次会だー！」

ご機嫌そうに乙女は手を挙げる。そのままこちらに寄り掛かってきた。

どっぴちちお気に召したようだ。

ほっと安心しつつ、未だ虚空を見上げるめくるに問いかける。

「めへめへちゃん、そいついついになったんだけど。ええと、一応訊くけど、めくる

ちゃんもうち来る?」

「えっ。やすやすの家に行っていていいんですか。……はっ。あ、いや、今は違う……。

うん、行かない……。帰ります、お疲れ様でした……」

ぼんやりした目で返事をしたあと、ちよっただけ我に返ったらしい。

まだぼうつとしていそつな顔でぼそぼそ呟き、そのままふらふらと駅に向かつてしまった。

魂が戻っていない……。あつちはあつちで心配だが、生憎、身体はひとつしかなかった。

あとで連絡しておこう……。と考えるながら、乙女に顔を向ける。

「じゃ、姉さん。いっつか」

「行くー! やすみちゃん、途中でスーパー寄ろ。まだお酒飲む」

「はいはい。いっけい、ちゃんと水も飲んでね」

乙女に肩を抱かれながら、夜の街をふらふらと歩いていく。

翌日。

由美子がお昼ご飯の準備をしていると、廊下からのっそりと乙女が現れた。

「おはよう、ごじゃいます……」

来客用のパジャマに身を包み、長い髪はぼさぼさで、声もしわがれている。

彼女はゆっくりと頭を下げた。

「昨日は、大変ご迷惑を……」

「いやいや。あたしは楽しかったよ。姉さん、コーヒー飲む？」

「飲む……、ありがとう……」

ふらふらと席に着き、自己嫌悪に陥っている乙女に「コーヒーを差し出す。

乙女は呻くように声を上げた。

「ああ……、めくるちゃんにも謝らないと……。ひどい絡み酒しちゃったなあ……」

いやあ、喜んでたからよかったんじゃないかな。

喉まで出かかった言葉を、由美子はコーヒで流し込んだ。

